

## エクステンジリングス

甘木数彦

### 第四章

#### 五

連絡を受けた永一は病室へ駆けつけた。ウォルターはウェンディと共に署へ戻っている。「被害者が身内である場合は冷静な聞き取りを行えない可能性があるので、別の者が聞き取りを行う」という無意味な規定のせいだ。

鳶春は数日前と同じ病室にいた。刺された傷は簡単に「治療」され、検査結果も良好だった。損傷した部分を取り替えただけなのだから当然のことだ。

人払いした病室には、永一と鳶春しかいない。廊下に立たせた警官を除けば、辺りには他に誰もいなかった。

永一は鳶春から一連の状況を聞き終えたところだった。

「それで、自分で病院に連絡したと」

「そうです」

それきり、鳶春は黙ってしまう。永一は溜息をつきそうになった。

最初から、永一は鳶春が苦手だった。表情にも声色にも、感情が感じられない。そのくせ口調は普通で、本人としては感情豊かなつもりでいるらしいこともやりづらかった。もちろん永一も鳶春の障害のことは知っていた。身近に接していれば僅かな表情や声の調子から感情が読みとれるということも鳶春の両親から聞かされていた。それでも実際にこうして向かい合っていると何を考え、どう感じているのかが読めないことに戸惑わされた。それにどうも、最初に会ったときほど鳶春は協力的でないような気がした。襲われたショックのせいだろうと思いたいところだが、他に何かがあるのかははっきりしない。

「やっぱり、この前のことと関係があるんですか？」

鳶春の声は言葉とは裏腹に、まったく興味がないかのように聞こえる。

「たぶんな。腑に落ちないところが多いが。だってそうだろう？ 今になって、という理由が判らない」

「それで、ぼくたちは監視されるんですか？」

「都市が集めている情報の中で、君とウェンディの所在が優先的にピックアップされるという意味なら、そうだ。見張りの警官が二四時間どこへ行くにも張り付いて回るという意味なら、それは違う」

「微妙な言い回しですね」

「すまない。色々あるんだ。がっかりついでに言うと、ウェンディと二人きりでひと気のない場所を出歩くのも謹んでもらいたい」

その言葉を耳にした鳶春の顔へ、表情と呼べそうな物が微かに現れた。だが、それがなんなのかは見極められない。

「その方が永一さんも安心ですよ。いろんな意味で」

鳶春の発言に、思わず永一は笑ってしまった。やっと鳶春の感情をかいま見たような気がした。

「俺はあいつの親じゃないんだ。男の友達がいろいろが気にはしない。君がウェンディの彼

氏だったとしても別にかまわない」

「彼氏なんて、全然そんなんじゃないですよ。だいいち、ウェンディはじきに帰国するんだし」

気を悪くしたのか照れたのか、人工の顔からは窺い知ることができない。

「ともかく、軽はずみな行動はしないように。また襲われたところで君は平気かもしれないが、ウェンディはそうじゃない。君だってウェンディに怪我なんてして欲しくないだろう」

鳶春はうなづく。永一は鳶春に自分の直通連絡先を教えると、病室を出て署に向かった。

署に戻るとウォルターの姿はなく、代わりにメッセージが残されていた。ウェンディを家まで送って行くということだった。そしてもう一つ、残されていた物がある。ウェンディとの会話を録音した音声ファイルだ。ファイルを再生すると、二人の遣り取りが始まった。ウェンディの話に鳶春の証言と食い違うところはなく、有力な手掛かりとはならなさそうだった。ただ、自分の姪が相方と話している状況は永一にとって不思議なものだった。

ファイルは最後まで来ると、自動的にまた最初から始まった。話の流れに耳を傾けつつ、永一は軽い失望を抑えることができなかった。被害者が同居している姪であるにもかかわらず、永一は心配するよりむしろ、二人の体験が犯人逮捕の手掛かりとなることを期待していたのだ。そして、そのことを後ろめたく感じていることも自覚していた。

期待を抱いていたのは、捜査が手詰まりに陥っているせいだ。現在進行中の犯罪である以上、解決までに求められるスピードは通常の事件よりも遙かに短い。それでいて、今のところ可能性があるのは旧式カメラによる犯人撮影とネットワークの調査という、悠長な線しかない。それも仮定に立脚しているだけなのだ。焦りが禁物だからといって、焦らずにいられるわけではない。

画像処理班から、早くも襲撃現場の再現画像が完成したという知らせが届いた。呼び出してみる。3 D で再現された現場がモニタに映し出される。まずは視点を適当に動かしてみる。かなり暗い。それから、証言を元に作成された犯人像を立たせる。確かに、二人の位置からは顔が見えない。鳶春の視点から、次いでウェンディの視点から犯人の動きをシミュレートするが、それでも犯人の顔は闇に覆われている。今度は一フレームずつ、犯人の動きを追った。物陰から飛び出し走り去るまで、犯人は完全に自分の顔が見られないよう、意識していることが窺われた。耳からはウェンディの証言が流れ込んでくる。それが終わると、鳶春の証言だ。そしてまた、ウェンディが語り出す。

永一は飽きることなく二人の視点から、あるいは犯人の視点から、現場を再生してみた。好きなところで止めて、現場内を様々なアングルから眺めてもみた。録音された証言と連動させてもみた。違和感があったのだ。映像の中に、永一自身が気付いていながらそれと認識できないようなものが。

あまりにも繰り返したせいで、永一は三人の動きをすっかり憶えてしまった。それでもまだ、永一は再現画像に見入る。最初の一フレーム目から最後のフレームまで無表情な鳶春。鳶春を刺して犯人が距離を空けたところでようやく事態を察し、驚きに顔を歪めるウェンディ。そして犯人の、空白の顔。

端末が鳴った。ウォルターからだ。

「もしもし」

「もしもし、じゃないですよ！いったい、いつになれば戻ってくるんです？」

ウォルターの声には、怒りの色がある。

言われてみると、けっこうな時間が過ぎていた。だが、普段からすれば別に遅いわけではない。

「今、どこだ？」

「永一さんの家の前ですよ。電話するんで出てきたんです」

「ずいぶんゆっくりだな。」

返事がない。ウォルターは携帯の向こうで絶句しているようだった。ややあって、深いため息が聞こえてきた。

「彼女はまだ学生なんですよ？ それが殺人犯に襲われて、目の前で友達が刺されて！

一人にできるわけじゃないじゃないですか。よくそんなことが

ウォルターの罵声がスピーカーから流れ続ける。

まただ。永一はウォルターの声を聞きながら、深い憂鬱に沈み込んでいった。被害者を前にすれば言葉が浮かばない。事件の解決に頭がいっぱいになると、すぐ被害者の苦しみや悲しみ、辛さが頭から抜け落ちてしまう。心情が絡まないおかげで解決だけに集中できるという面もあるが、やはりこうした出来事があるたび落ち込まずにはいられない。ましてや今回は同居人が被害にあったのだ。なのに自分は、再現画像に描かれたウエンディの顔を何度も目にしているさえ、心配など欠片も浮かばなかった。

「聞いてるんですか？ 永一さん」

ウォルターの声で永一は我に返る。

「すまない。二〇分以内で署を出る」

一方的に告げると、永一は通話を切った。これ以上、なにも言われなくなかった。

画面に目を向けると、ウエンディが怯えた顔のまま停止している。永一は画像を閉じ、帰り支度を始めた。

家に着き玄関を入ると、ウォルターが出てきた。

「長々と迷惑かけたな。すまない」

「僕のことはいいんです。それよりもあの子に謝ってください」

「様子は、どうだ」

「いちおう落ち着いています」

「そうか」

「じゃ、僕はもう帰ります。と言っても、署に戻るだけですけど」

「わかった。色々ありがとうございます」

「永一さんのためじゃありませんよ」

そう言うとウォルターは会釈して出て行った。ドアが閉まるまで待ってから、永一は靴を脱いで家に上がった。

居間ではウエンディが椅子に座って端末を覗き込んでいた。永一の足音に顔を上げる。

「おかえり」

その声はいつもより沈んでいるようだった。

「ただいま。遅くなって悪かった」

永一はカバンを脇へ置くと、ウェンディの向かいへ腰を下ろす。

「しょうがないよ。帰れないから、あの刑事さんに一緒にいるように頼んでくれたんでしよう？」

「ああ。まあな」

おそらくウェンディがショックを受けないようにと思っただけのことなのだろうが、それでも永一は事実を喋らなかつたウォルターに感謝した。

「鳶春君に、会ったんだよね？ どうだった？」

「ケガしたところは、もういいみたいだ。話し方もしっかりしてたし、大丈夫だろう」

「よかった」

会話はそこで終わってしまった。ウェンディが被害者だと思えば思うほど、いつものように言葉が出てこなくなる。ウェンディは再び端末に目を落とす。仕方がないので永一はキッチンへ向かうと、コーヒーを入れて戻ってきた。

「ねえ。チェンジリングって知ってる？」

コーヒーを飲もうとしたところで、ウェンディが言った。

「いや」

「妖精が人間の赤ちゃんを誘拐して、代わりに丸太とか妖精の赤ちゃんを置いていくことなんだって」

「それが、なにか」

「国語の宿題やってるんだけど、明日は私が発表しなくちゃならなくて。昔話についてなんだけど、イギリスの話を紹介して欲しいって先生に頼まれて」

「発表っておまえ」

「たぶん行けないのは判ってる。ただ、何かして気を紛らわせようと思っただけ」

「そうか。それにしても、チェンジリングがどうかしたのか？」

「別に。ほら、私たちが襲った犯人も子供を攫ってるから、なんとなく連想しただけ」

あまり納得のいく話ではなかつた。ひょっとしたら犯人を妖精と重ねることで、無意識のうちに出来事の心理的な圧迫をやわらげようとしているのかもしれない。永一はウェンディの話に付き合うことにした。

「なんで妖精はそんなことするんだ？」

「一つは、人間の赤ちゃんの方が可愛いから。もう一つは、妖精の子供を人間に育ててもらいたいから。人間の方が妖精よりも、ミルクの栄養があるんだって」

「そんなこと言ったって、妖精の子供を育てる奴はいないだろう」

「だからたいていはすぐ判る。でも魔法で、妖精の子供を連れ去った子供そっくりに変身させてることもあるみたい。まあ赤ちゃんだし、見た目が似てれば気付かないんじゃないかな。でも、ダメなんだ」

「ダメって？」

「妖精の赤ちゃんは育つのがすごく遅いから、人間の目にはいつまで経っても大きくなれないように見える。それで判るってわけ」

「なるほどな。そりゃ誰だっておかしいと気付くわけだ。それで、それからどうなるんだ？」

「けっきょく、最後は親の機転で子供が無事に帰ってくる」

「そうか……」

ウェンディの話を書くうち、永一の中で嫌な感覚が膨れあがってきた。二十数年前の、ある事件のことを思い出したのだ。専従捜査員ではなかったが当時、永一も捜査を手伝った。

それは誘拐事件だった。生まれたばかりの赤ん坊が、警戒厳重な病院から連れ去られたのだ。ただし、発覚には少し時間がかかった。犯人が連れ去ったのとそっくりなアンドロイドを置いていったのだ。ウェンディの話は妖精をアンドロイドに置き換えると、事件とよく似ている。

事件はまだ解決していなかった。捜査本部はとうに解散し、今では担当の刑事が他の捜査の合間に細々と調査しているだけだ。まさか今の事件とあの事件が同一犯によるということはないだろうが、思い出してみればどちらも犯人の痕跡がまったく残っていないなど、偶然にしても気がかりな共通点がある。

そこで永一は思考を中断した。また事件のことを考えるのに没頭して、あやうく自分がなぜ帰ってきたのかを忘れそうになっていた。

「メシは、食ったのか？」

「ううん。あんまり食欲ない」

「こういうときは、食べた方がいいんだ。よかったら」食べに行くか、と言いかけて言葉を切る。今は外へ出たいような気分じゃないだろう。「よかったら、ピザでも取るか。他のものでもいいし」

近所の宅配サービス一覧を端末で呼び出す。

「ピザでいいよ」

永一はウェンディの端末へメニューを送り、何がいいかを尋ねてピザを注文する。

「それにしても鳶春君といい、お前といい、しっかりしてるな」

永一は努めて明るい声で言った。

「どういうこと？」

「いやな、普通はたとえケガがなくても、襲われればもっと動揺するもんだ」  
褒めれば多少は元気が出るかもしれない。永一はそう考えていた。

「怖くないわけじゃないよ。けど、あんまり現実味がなくて。特に、あの後すぐは頭が麻痺したみたいになってたから。家に帰ってほっとしたら、逆に怖くなった」

ウェンディは微笑んでみせたが、その笑顔は心なし強張って見えた。永一は、そんなウェンディを放って署にいた自分を責める思いに駆られた。

「やっぱりわたし、帰ることに？」

永一はウェンディが留学中であることをすっかり忘れていた。

「それは判断の分かれるところだ」そう言いながら、永一は頭の中に浮かぶ様々な要素をぐるりと見渡す。「確かに、帰った方が安全ではあるが……。そうだな。現場検証だけは付き合ってもらうことになるかもしれない。その後は」そこで重大なことに思い至る。「弟たちには連絡したか？」

「ううん。まだ」

「そうか。とりあえず、どこに連絡すればいいのかは調べてみよう。留学の主催者にも報告しなきゃならんだろうし。悪いが留学生が事件に遭った場合、どうすればいいのか今すぐには思い出せない。何十年も前に研修で聞いたっきりでな。いや、ひょっとしたら一度

も聞いたことがないのかもしれない」そこでまた、永一は言葉に詰まる。貴重な目撃者を手放したくない思いと、姪を利用することへの抵抗感。だがこれ以上、自分の人間性を疑うようなことはしたくないという気持ちが勝った。「ともかく、早急に帰れるようにするから安心しろ」

「帰りたくない」

「こんな結果になって残念だが、いや、なんて言った？」

「できれば、ここに残りたいんだけど」

信じられなかった。襲撃を受けて、見た目以上に混乱しているのだろうか。

「いったい、どうして」

「言わないと、だめ？」

「そりゃお前、思い出させたくはないが、酷く危ない目にあっただぞ」

ウェンディはしばらく迷うように目を閉じていたが、やがて言った。

「父さんと母さん、ずっと仲が悪いの。この前も父さんの浮気が。伯父さんに挨拶したときは普通にしてたけど、あの後も言い争いになっちゃって。私が留学しようって思った理由の一部は、そのせい。成績が優秀なら留学も延長できるし、高校の卒業資格だって取れる。それでわたし、日本の大学に進学しようと思ってて。とにかくもう、あんな家には帰りたくない」

初耳だった。しかしよく考えてみれば弟夫婦については、何を聞かされようが初耳なのだ。それに、今までこうしてウェンディ自身やその家族について話を聞くような機会もなかった。それになんとか永一の中で久一は内気そうな若者のまま時間が止まっており、わざわざ近況を尋ねるほどのこともないような気がしていた。

「だが、また襲われるかもしれないんだぞ。家庭に問題があるなら俺も解決に力を貸す。いくら仲が悪かるうが、いや、仲が悪いからこそお前がそばに居てやらなくちゃならないんじゃないか？」

「わたしもそう思った。でも違う。わたしが居るから、二人とも冷静に考えられなくなるの。自分の気持ちを考えようとしても、わたしのことを考えちゃうから余計にややこしくなる。だからいったん私のことは抜きにして、それで二人にはそれぞれのことを考えてもらいたい。それに、危ないって言うんなら伯父さんが護ってよ。刑事なんでしょ？」

永一が気圧されるほど、打ち明けるウェンディは苦しげだった。永一は今までに出会ってきた被害者達のことを、容疑者達のことを思い出した。けっきょく、いつだってある問題について一番あれこれ考えているのは当事者達なのだ。第三者である永一の考えることなど、彼らはとうに検討済みだ。ましてウェンディは頭の回転が速い。永一が考えつくことなど、こうなる前に無効であることが実証されているのだろう。

永一は大きく息を吐くと、うなずいた。

「お前の望んだとおりになるよう、できるだけ努力しよう。もちろん、ここにいるあいだは警察が、俺がお前を護る。ただ期待はするなよ。常識的に考えて、それでも俺はお前の親にこのことを黙っておくわけにはいかないだろうし、なんであれ法を曲げるようなマネはできない」

「うん。判ってる。無理言っでごめん。でも、ありがとう」

ウェンディは微笑んだ。今度はぎこちなさを隠そうとしていない。いい兆候だ。

インターホンが鳴った。ピザ屋の宅配が来たのだ。永一はウェンディに微笑み返すと立ち上がった。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>